

百周年記念特輯の刊行にあたって

関西大学は、本年、創立百周年を迎える。明治19年に関西法律学校として発足以来、1世紀を経たことになる。もとより大学は、歴史の永きことをもってのみ尊しとするものではない。しかし、明治以来の変転めまぐるしいわが国近代の歴史を顧みるとき、本学が百年の風雪に耐え、今日2万有余の学生を擁する一大学園に発展し、日本を代表する私学のひとつと数えあげられるようになったことについては、率直に慶び、また誇りとしたいと思う。もちろんそれはひとえに、先人の努力と献身によって初めて得られたものである。幾多の先人に感謝するとともに、現在の関西大学を支える者がその伝統を後代に伝えてゆくためにも、百周年という区切りのいい年を祝い、その重い使命を再確認する意義は決して小さいものではない。

百周年を迎えるにあたり、本学では記念行事の一環として、学術論文集の発行を1年以上前から企画、準備してきた。このような記念論文集は、昭和11年に創立五十周年を機に刊行されたのを嚆矢とするが、第2次世界大戦終了後、新制大学発足とともに、各学部（学会）で学術専門誌が発行されるようになり、昭和30年には創立七十周年記念特輯、昭和40年、創立八十周年記念特輯、昭和50年、創立九十周年記念特輯がそれぞれ、各学部で刊行されてきた。

これらの記念号は、質・量ともに、発展・充実の一途をたどってきたが、この10年間の本学のスタッフ及び研究諸施設・図書・資料の充実は本学の永い歴史においてもきわだっており、今回の創立百周年記念特輯は、以前にも

ましてそれぞれ専門の学会で高く評価される業績を多数含むものとなっていることが期待される。

本学の基本的な教学理念のひとつに「学の実化」があるが、これは大学が社会の発展と無関係であってはならないことを意味する。学問研究を通じて、社会が悩むことをともに悩み、大学がもつ機能を弁えつつも、社会の変革にたいして、先導的役割を果たして行きたいという先人の思いがこの言葉に集約されている。このモットーを受けて、関西大学は現在「国際化」、「情報化」、「開かれた大学」の三つを具体的な教学の実践課題として掲げ、外国五大学との公式提携と研究者の受け入れと派遣、情報処理センターの設置とその充実、さらには大規模な学術調査の実施、数多くの地域社会と提携した市民講座の開催・運営等に積極的に取り組んでいる。

このような活動の直接・間接の成果もまた、今回の記念特輯には数多く含まれ、本学の創立百周年を記念するにふさわしいものになっている。この記念号の刊行が、本学の学問研究の飛躍的な発展にとっての、新しい一里塚となることを願ってやまないものである。

昭和61年11月4日

関西大学学長 大西昭男